

「雪国」殺人事件

新装版

西村京太郎

Kyotaro Nishimura

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章	「雪国」への出発	7
第二章	酒と唄と	38
第三章	口紅	69
第四章	雪の中の殺人	102
第五章	母と娘	134
第六章	雪崩	167
第七章	終章	197

「雪国」殺人事件

第一章 「雪国」への出発

1

橋本豊は、川端康成の小説『雪国』を持って、東京駅から、上越新幹線「あさひ337号」に、乗った。

座席に腰を下し、列車が動き出してから、本のページを開いた。

有名な「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった」の言葉で始ま

る小説に、橋本は、次第に、引きずり込まれ、自分が、主人公の島村の気分になっていった。島村は、今でいえば、フリーターみたいな人間だろうか。

彼が、一年ぶりに、越後湯沢えちごゆざわに、芸者駒子に会いに行くとところから、この小説は始まっている。

橋本は、島村ほど、優雅な生活もしていない。橋本には、前科があり、刑務所生活を経験している。

刑事だった男が、いかに、止むやを得なかったとはいえ、人殺しをしたのだから、最低の刑事だった。

出所後、その刑事だった頃の経験を生かして、私立探偵を開業した。

だから、橋本には、いつも、人を殺した時の

負い目が、ついて回るのだ。

これから行く越後湯沢では、『雪国』を記念して、毎年、「湯沢温泉雪まつり」を行い、その中でミス駒子を、選出している。

ミス駒子は、別に土地の娘とは限らず、スキーに來た女子大生や、OLでも構わない。

去年のミス駒子には、久しぶりに、土地の十九歳の娘が、選出された。

置屋の一人娘で、お座敷に出たばかりの高村真紀、芸者としての名前は、菊乃である。

橋本は、これから、このミス駒子に会いに行く。

だが、小説の中の島村みたいに、ロマンチックな気分で、会いに行くのではない。

仕事だった。

昨日、久しぶりに、探偵事務所に、女の客が

訪ねてきた。

彼女の名前は、長谷川章子。四十三歳。夫はM証券の部長で、透という大学三年、二十一歳の息子がいる。

去年の春休み、透は、越後湯沢に、スキーに行った。

「そこで、ミス駒子に選ばれた娘さんと知り合ったんです。地元の方で、芸者になったばかりの高村真紀さんという人」

と、章子は、いった。

「息子さんは、その女性が、好きになったわけですね？」

と、橋本は、きいた。

「ええ。息子がいうには、とても、恥しがり屋で、古風な女性だから、好きになったというんですよ。今、自分の周囲にいる娘さんたちは、

みんな、わがままで、男に何かして貰いたいとばかり、いつている。僕は、自分がわがままでから、そういう女性は苦手で、湯沢で会ったミス駒子のような人がいい。出来たら、結婚したいというんです」

「反対なんですか？」

「反対も何も、私も、主人も、その娘さんに会ってないし、もちろん、どんな人なのか、知らないんですよ」

「なるほど」

「ですから、この娘さんのことを、調べて来て欲しいんです。何もかも」

と、章子は、いった。

「何もかもというのは、どういうことですか？」

「良い点も、悪い点ですわ。ただ、これは、

あくまでも、内密に、お願いしたいんです。息子が知ったら、怒るに決つてますから」

と、章子は、念を押した。

「一つだけ、確認しておきたいことがあるのですが」

橋本は、いった。

「何でしょうか？」

と、章子が、ちよつと警戒する感じできく。

「この娘さんは、芸者ですよね」

「ええ」

「もし、息子の嫁に、芸者なんか、とんでもないと思つているのなら、この調査は、止めた方がいいですよ。私は、お金が貰えて助かりますが」

と、橋本は、いった。

「なぜ、そんなことを、おっしゃるの？」

「前に一度、これは一人娘のことで、お母さんが見えたことがあるのです。ロックスンガーが好きになって、一緒になりたいといっている。

その男のことを、調べて欲しいということ、調査しました。一見、金にも女にも、だらしない男に見えたんですが、これが、びっくりするくらい真面目なんです。その通りの調査報告書を書いて、渡したんですが、その母親が、怒りました」

「なぜですか?」

「彼女は、こういいました。私は、彼が、女や金にだらしないという報告書が来たら、それを娘に見せて、諦めさせようと思っていた。それなのに、こんな報告書では困る。書き直してくれということです。調べた結果、どうしようもない男だと書いてくれというわけです」

「それで、どうなさったんですか?」

「希望どおりの報告書を作ってくれば、百万円払うといわれましたよ。私は、正直にいつても金がなくて、百万円は欲しかった。でも、断りました。そのお客には、こういしました。私は、調べた通りの報告書は、撤回しない。ただ、それを、娘さんに見せる、見せないは、あなたの自由ですと」

と、橋本は、いった。

章子は、興味をそられたという顔で、

「それで、そのお客は、どうしたのかしら?」

「わかりませんが、金さえ出せば、希望どおりの調査報告書を書いてくれる私立探偵を探したんじゃないませんか」

「そういう探偵さんもいるんですか?」

「いないことはありませんよ。だから、あなた

も、そういう希望なら、私に依頼するのは止めた方がいい。無駄なお金を使う必要はありません」

と、橋本は、いった。

（こんなことをいうから、おれのところには、客が来なくなるんだな）

と、橋本は喋りながら、自己嫌悪に落ち込んだのだが、章子は、微笑して、

「私は、相手が芸者さんだって、いい人なら、息子と結婚させたいと思いますよ。だから、調べて来たなら、そのまま正直に、書いて、教えて下さいな」
と、いった。

2

橋本は、本から眼をあげて、窓の外に眼をや

った。

新幹線は、高崎を過ぎたところだった。

三月に入り、東京の街には、春のきざしが見えていたのだが、新幹線が、大宮、高崎と過ぎて行くにつれて、窓の外は、次第に、春から遠ざかり、冬に逆戻りして行くように感じられた。眼をこらすと、夜の闇の中に、白いものが光り始め、それが、はつきりと、雪片とわかってくる。列車のスピードが早いので、粉雪は、斜めというより、真横に飛んでいくように見える。その中の一粒が、窓ガラスにへばりついたと思うと、一瞬の中に溶けて、水滴となり、筋となって、それも、真横に流れていく。

今年の「湯沢温泉雪まつり」は、三月一日に、開かれ、今年も、ミス駒子を選ばれた。

依頼者の息子の長谷川透は、今年も、「湯沢

温泉雪まつり」に合せて、スキーに行き、去年のミス駒子こと、芸者菊乃に会った。それでいよいよ、彼女が好きになり、帰って来ると、両親に、彼女と結婚したいと話した。

（あの母親は、相手が芸者でも構わないといったが、正直な気持とは、思えないな）
と、橋本は、考える。

長谷川章子は、話の中で、殊更に、息子の透が、国立大学の法学部三年で、成績が常に、五番以内だといったり、夫が、エリートサラリーマンで、M証券の将来の重役を約束されていると話したりしたのは、彼女の気持の中で、息子の嫁にふさわしいのは、良家の娘であって、芸者をやっている娘などではないということがあったのだらうと、橋本は、考える。

たいていの母親は、同じなのだ、橋本は、

仕事柄、知っている。

男の子の母親は、折角、大学まで行かせたのに、なぜ、よりによって、あんなバカな娘と結婚したいのかとなげき、女の子の母親なら、今まで、大切に育てて来たのに、どうして、あんな、何処どこの馬の骨ともわからない男と一緒にになりたいのかと怒る。

そして、たいてい、不満ながら、妥協するのも、母親だからだらう。

今度の件も、相手の芸者が、いい性格の娘なら、あの母親も、息子との結婚に、結局、同意するだらう。息子に恨まれるのが怖いからだ。

だから、橋本は、ミス駒子の芸者菊乃が、素敵な娘であって欲しい。気楽に、報告書が、書ける。

雪は、いぜんとして、降り続けている。

『雪国』では、トンネルを抜けるとだが、今日は、トンネルの手前で、すでに、窓の外は一杯の雪景色になった。

大清水トンネルに入る。

この長いトンネルを抜けたところが、越後湯沢駅である。

『雪国』の島村は、トンネルを抜けたとたんに、雪国を見て感動するのだが、トンネルのこちら側で、すでに、雪を見ていては、果して、彼のように、感動できるかどうか。

トンネルは長い。新幹線のスピードをもってしても、七、八分はかかる。

その間、橋本は、窓の外を見ていた。というより、トンネルの暗さのために、窓ガラスが、鏡のように、車内の景色を映し出している。それを見ていたといった方がいいだろう。

島村は、夜汽車の窓ガラスに映る少女に、ひかれる。駒子の妹分で、薄幸で、一途で、いや、一途だから、薄幸なのか、葉子に、ひかれるのだ。

橋本も、無意識に、葉子のような美少女を、探していたのかも知れない。

だが、現実に、そんな楽しい出会いがある筈はない。乗客たちは、眠っているか、週刊誌を読んでいる。若い娘もいるが、たいていは、カップルで、次の越後湯沢で降りるために、その支度したくを始めている。スキーウェアが、やたらに、華やかで、薄幸な感じの娘など、一人もない。

突然、列車は、トンネルを抜けた。

雪国は、——やっぱり雪国だった。

3

同じ雪景色でも、トンネルのこちら側は、雪の重さが、違っていた。

どっかりと、厚い雪が、道を蔽い、家々の屋根を蔽い、駐とまっている車に、かぶさっている。それに、振り払っても振り払っても、でんとして動こうとしない頑固な雪のかたまりなのだ。

列車からホームに降りて、コート姿の橋本は、寒さに震えあがった。他の乗客は、スキーを担ぎ、みな温かそうなスキーウェアで、身をかためているから、一層、橋本は、寒そうに見えるに違いない。

(スキーウェアを着てくれれば良かったかな?)

と、思ったが、彼の持っているのは、五、六年前のスキーウェアだから、かえって、違和感

を助長するだけだったかも知れない。

駅前のタクシーのりばに出たが、なかなか、タクシーは、来ない。雪は降り続けているし、道路のあちこちに、除雪した雪の山が出来ているので、車が走りにくいのだろう。

三十分近く待って、やっとタクシーに乗ることが出来た。

予約しておいた、いろは旅館に入る。

最近は、どこでも、大型ホテルが出現しているが、この旅館は、昔風の木造二階建てだった。それが嬉しい。

橋本は、遅くなったことを、女将おかみさんに詫びてから、まず、丹前を羽織り、一階の大浴室に向った。

小さな中庭に面した浴室は、檜ひのき風呂で、誰も入っていない。降りしきる雪が、音を消して

しまうのか、浴槽に身体を沈めると、何の音も聞こえない。

湯気で、曇っている窓ガラスを、てのひら掌で拭くと、中庭が見えた。

白い雪片が、音も無く降り積っている。庭には、積雪が、小さな山を作っていた。根雪が、溶けずに残り、その上に更に、雪が降って、山を作っているのだ。

中庭は、頑丈な垣根で囲われているので、積雪を、外へ運び出せないらしい。

ここへ着いてすぐ、女将に、明日、芸者の菊乃を呼んでおいて欲しいと、頼んでおいた。

去年のミス駒子だから、簡単には呼べないだろうと思っただが、女将は、

「多分、大丈夫だと思いますよ。今は、ひま閑でしょうから」

「でも、どのホテル、旅館も、満室に近いんでしよう。お座敷も、多いと思うんだが」

橋本が、いうと、女将は、笑って、

「冬は、お客様は、一杯いらっしやいますけど、ほとんど、スキーを楽しむ若い人たちか、休みの子供を連れられた家族のグループですよ。そういう人たちが、芸者を呼びます？ だから、いくら、お客様が多くても、芸者は、閑なんですよ」と、いった。

橋本は、浴槽につかりながら、その時の女将の言葉を思い出していた。

橋本は、刑事時代も、今も、温泉地へ行き芸者を呼んで楽しむほどの余裕はなかったから、女将のいったことに、そんなものかと、感心した。

明日、菊乃が来てくれれば、今回の仕事は、

早くすみそうだ。自分で、彼女を見て、それから、彼女のことをよく知る同僚の芸者や友人、知人に会って、彼女の噂を聞けば、調査報告書は、作れるだろう。

翌朝、二階の部屋で眼をさましたのは、昨夜が遅かったせいで、午前八時を回ってしまっていた。

今朝の食事は、八時半にしてくれと頼んである。あわてて起きあがり、窓のカーテンを開けた。雪は止んでいて、朝日が眩しく反射している。

山の中腹に作られたスキー場が、遠望できる。朝早い時間なのに、もう、リフトが動いていて、何人かのスキーヤーの姿も、見えた。

部屋係の男がやって来て、手早く布団をたたみ、テーブルの上を片付け、仲居が、朝食を運

んで来た。

「もう、滑ってるスキーヤーがいるんだね」

と、橋本がいうと、

「皆さん、二、三日しか休みがないみたいで、だから、朝早くから、夜おそくまで、滑っているみたいですよ」

と、仲居は、いう。

「夜も？ ああ、夜間照明もあるんだ」

「ええ。今は、無いところは無いんじゃないか。せんか。すぐ、召しあがりますか？」

と、仲居は、いう。

橋本は、うなず肯いて、座布団に腰を下した。

仲居が、お茶をいれ、ご飯をよそってくれる。

「今夜、芸者の菊乃さんと呼んでいるんだ。去年のミス駒子で、美人だというんでね」

と、橋本は、いった。

「そうですか」

「どんな芸者さん？」

「去年のミス駒子で——」

「そうじゃなくて、評判さ。芸者だって、今の若い娘だから、わがままでとか、今どきの若い女には珍しく、礼儀正しくて、むしろ古風だとか」

と、橋本は、いった。

「お客さんに、人気がありますよ。明るくて、話がうまくて、楽しい娘だから」

と、仲居は、当り障りのないことをいう。

「今年も、ミス駒子が、決ったんだね？」

「ええ。三月一日に。今年は、残念ながら、新潟のOLさんでしたけど」

と、仲居は、いう。今年は、全国から、一三

五人も応募者があったのだと教えてくれた。

「でも、今の若い人たちは、駒子が、どんな女性か知っているのかな？ 小説を読んでるんだらうか？」

と、橋本は、いった。

「どうでしょうか。この近くに、資料館があるんですけどねえ」

「うん」

「そこに、駒子のモデルだという芸者さんの写真が飾ってあったりするんですけど、見に行く人はほとんど、いないそうですよ。こんなに沢山、スキーのお客さんは、来ているのに」

と、仲居は、苦笑する。

そんなものかも知れないと、橋本は思った。

彼は、仕事で、一度、城崎きのさきへ行ったことがある。

城崎は、志賀直哉の「城の崎にて」で有名だ

が、そう思うのは、その小説を知っている人間の間でということ、知らない者の間では、古い温泉地で、最近、海岸に、大きな水族館が出来たぐらいの知識しかないだろう。

実際に、城崎に着いて、それを実感した。駐車場に使われている公園では、そこから出るケープル・カーに人は集まるが、公園の隅にある志賀直哉の文学碑を見に寄る人は、ほとんどいないし、第一、若い人たちは城崎に着くと、古い温泉街には行かず、水族館や、龍宮城（沖の小島に作られている）のある日和山行のバスに乗ってしまうと聞いた。

朝食のあと、橋本は、タクシーを呼んで貰い、まず、仲居のいった資料館に行ってみることにした。

タクシーは、古い街並みを走る。周辺には、

高層のリゾートマンションが、林立し、関越自動車道が、南北に走る。旧市街と、新市街という感じだった。

タクシーは、旧市街の古い街並みを見ながら走る。道が狭く、ところどころに、除雪された雪が、かたまりになっていたので走りにくい。道路に、雪を溶かすための噴水が出ている所もあるが、橋本の眼には、弱々しくて、あまり、役に立っているようには、見えなかった。

観光客の姿は、ほとんど見えない。その時間、みんな、周辺のスキー場に行ってしまったのだろう。

問題の資料館は、何の変哲もない、小さなコンクリートのビルである。ひっそりとしていて、人の気配はない。休館かと思ったが、窓口に、ちゃんと、女性が座っている。

入場料を払って、中に入る。誰もいない。湯沢の歴史がわかるような、昔の農器具などが、展示されている。駒子のモデルだろうといわれる松栄という芸者の写真も、パネルにして、壁にかかっている。

橋本の頭の中の駒子は、どうしても、映画になった駒子である。シロクロ映画の岸恵子か、カラーになってからの岩下志麻になってしまう。

パネルの中の松栄は、良くいえば素朴で健康に見えるが、野良着のような服装のせいもあって、芸者というより、農家の娘の感じがする。

橋本は、眉を寄せて、パネルを、しばらく、見つめていた。

この娘と、小説や映画の中の駒子とを結びつけるのは何なのだろうと思う。作家の途方もないイマジネーションなのか。

それとも、この娘は、外見とは違って、小説の中の駒子と同じ心を持ち、自意識が強く、自分が傷つく繊細さを持っていて、作者は、そのまま、書いたのだろうか。

その思いが、自然に、今夜、会う、芸者菊乃のことに、移っていく。

(調査依頼主の章子は、彼女のことを、息子の言葉として、古風で、恥しがり屋の娘だといっていたが、その通りなら、調査報告書は、書き易いのだが)

と、思った。

ふいに、背後に人の気配がして、橋本は、振り向いた。

大きな男が、立っていた。五十歳くらいだろう。無精ひげを生やし、うす汚れた革のジャンパーに、ゴム長という恰好だった。

彼は、橋本の姿など、眼中にないという顔で、パネルの中の松栄を見つめ、禁煙を無視して、煙草に火をつけた。

「ここは、禁煙ですよ」

と、橋本が、声をかけると、男は眼だけ、橋本に向けたが、何もいわず、そのまま煙草を吸い続けている。

橋本は、むっとして、もう一度、

「ここは、禁煙」

と、少し、強い口調で、いった。

男は、一瞬、橋本を睨みすえてから、何もいわずに、部屋を出て行った。

(おかしな奴だな)

と、思ったが、橋本も、タクシーを待たせておいたのを思い出して、帰ることにした。

外に出て、タクシーに乗る。

「観光客が、集まる場所は？」

「この時間なら、ガラ湯沢じゃないかな。あそこは、日帰りでも、スキーが出来るから」

と、運転手は、いった。

ガラ湯沢のことは、橋本も、話には聞いていた。冬季にだけ利用される上越新幹線の駅である。

越後湯沢駅から、三分の近さで、駅全体が、スキー客のためのものになっているらしい。旅館のパンフレットにもあるが、貸スキー、貸靴、貸ウェアと揃っていて、レストランもあり、この駅から、近くのスキー場に向って、ゴンドラが、運行されている。

東京から、ガラ湯沢行の新幹線に乗ると、一時間三十分ぐらいで着く。朝、東京を出れば、昼前には着くから、ここで、レンタルで、スキ

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。